

宮本三郎

二〇〇九年十二月五日(土)
二〇一〇年三月二十二日(月祝)

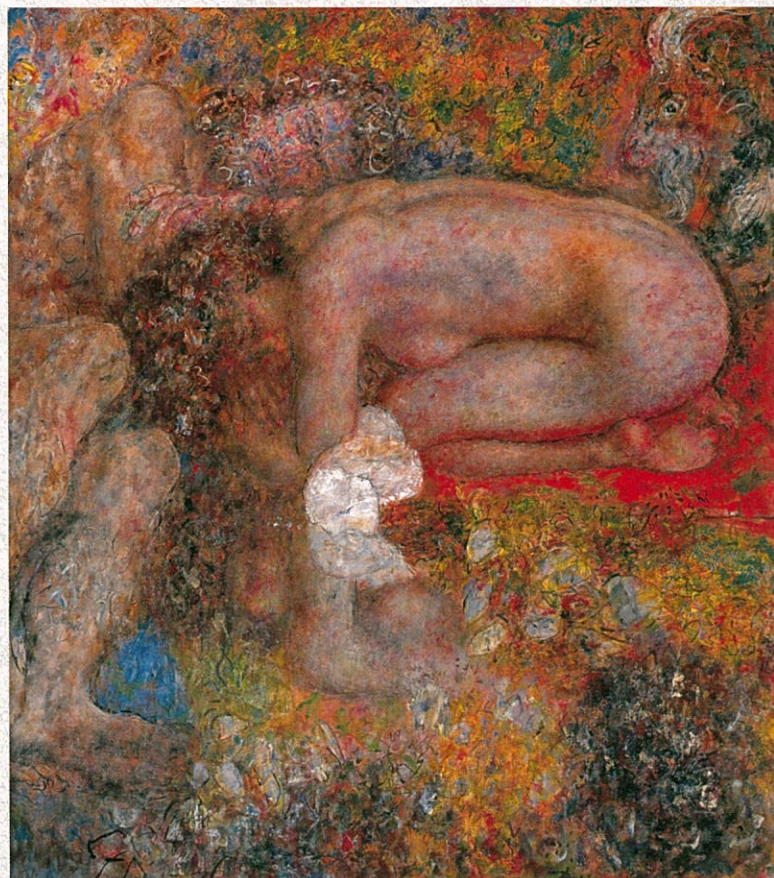
美を語る言葉

世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館

〒158-0083 東京都世田谷区奥沢五三十八-13 電話：〇三-5483-3836 開館時間：午前10時～午後6時(入館は午後5時30分まで) 休館日：毎週月曜日(ただし祝日の場合は開館、翌日休館)、年末年始(十二月二十八日～一月四日) 観覧料：一般200円(百六十円)、大・高生百五十円(百二十円)、中・小生、六十五歳以上、障害者(一般)百円(八十円) ※内は二十名以上の団体料金。中・小生は土・日・祝日は無料。障害者で小・中・高・大学生、および障害者の介護者(当該障害者一名に付き二名に限る)は無料。交通：東急大井町線・東横線「自由が丘」駅(徒歩七分)、東急大井町線「九品仏」駅(徒歩八分)、東急目黒線「奥沢」駅(徒歩八分)



《若き妊婦》1964年



《生》1974年

絵は毎日描いていても、さて、それを一歩前進させたり、一段と高所に進むことはなか／＼困難事であることが想われる。

或る限られたモチーフに取り組み、それを或る期間中ひた押しに進めることで、一歩でもその深味に入り込み得ないものかとは、つねに念願して居ることだ。

つまり、自身に或る強度の制約を課し、日々を或る主題の中に規制することで、傑作秀作の可能性の中に追い込もうと考えるものである。

宮本三郎「花と裸婦を描く」(「三彩」一九六七年八月号)

眼は心の窓などと言われているけれど、美術史上に表わされて来た「眼」の歴史を探ぐると、「心の窓」としての眼の表現はつねに変わり続けて来ていることが分る。例えば古代エジプトや、ピサンのモザイクなどの聖像たちの眼は大きく見開かれてはいるけれど、どちらかと言えば物を見ていない眼である。で、歴史上の「眼」の表現を大別すると、「見ている眼」と「見られている眼」とがあるように思う。

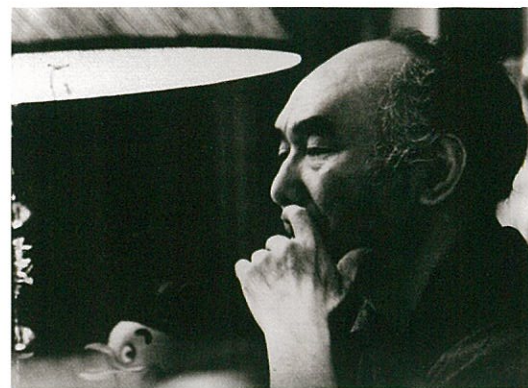
宮本三郎「眼の描き方」(「美術手帖」一九六七年二月号)

私の五十年はまた「時代」という魔物の強
 圧に対応出来るような自分の中の「気質」
 の発見への模索にあったかと思うが、二十歳
 代の後半から三十歳の初めに、或る様式と
 或る方向を見出し得て、私の作画が活気づ
 くのであるが、この傾向は、近頃のそれとも
 相通じるところがあつて、そこに、より正直
 な「私」の姿を見出し得るように思える。

宮本三郎『画集 宮本三郎』（一九七三年、毎日新聞社）



《ヴィーナスの鞋い》1971年



宮本三郎（1905～1974）が画業の中で残した、様々な「美」をめぐる言葉。それらが手がかりに、私たちは彼の絵画表現をどのように読み解くことができるでしょうか。

戦後の洋画壇きつての論客としても知られた宮本は、五十年にわたる画家生活の中で、多彩な絵画技法とともに、美術に対する深い造詣を身につけていきました。戦前・戦後を通じて、数々の美術雑誌で古典絵画の紹介から近代絵画の作家論を寄稿するほか、多くの美術評論家や画家達との対談に参加しています。また、著書『人物の描き方』や雑誌『アトリエ』では、絵画を学ぶ人々に向けた技法解説を、実技も交えて丁寧に指導しました。

一方、絵画表現においては一定の画風や様式に留まることなく、身につけた様々な知識を咀嚼・吸収し、作品の随所で自らの表現として描出しながら、独自の写実表現を追求していきました。その変幻自在ともいえる表現方法は、生来のデッサン力に加え、長年の研鑽で獲得した高度な技術に支えられていました。

本展では、宮本の蔵書などの関連資料も交え、彼の美術論や作品批評、自作について語った言葉などを紹介しつつ、自身の創作活動との間に生じる相関を考察したいと思います。

（前略）一見写実的な絵に見えるが、実物に倣って描写したところは、実は何処にも無いのである。（中略）画家の主観が、抽象的な画術をかりて、一気に対象物を征服し、そこに在るが如く実感させているのである。

宮本三郎『アンドレ・ドラン』（『美術手帖』一九五四年十月号）



《静物 果物》1945～48年頃



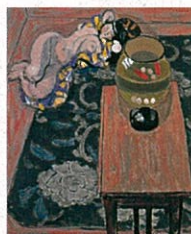
《化粧室の裸婦》1965年



《裸婦》1957年



《海浜・海の記念日》1967～68年頃



《室内裸婦》1937年

宮本三郎 美を語る言葉

2009年 12月5日(土)～3月22日(月・祝)

世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館

〒158-0083 世田谷区奥沢5-38-13 TEL:03-5483-3836

■開館時間 10:00～18:00(入館は17:30まで) ■休館日 毎週月曜日(ただし祝休日の場合は開館、翌日休館)、年末年始(12月28日～1月4日) ■観覧料 一般200円(160円)、大・高生150円(120円)、中・小生、65歳以上、障害者の方100円(80円) ※()内は20名以上の団体料金。中・小生は土・日・祝日は無料。障害者で小・中・高・大学生、および障害者の介護者(当該障害者1名につき、1名に限る)は無料。 ■交通 東急大井町線・東横線「自由が丘」駅(徒歩7分)、東急大井町線「九品仏」駅(徒歩8分)、東急目黒線「奥沢」駅(徒歩8分)



■展覧会関連企画

「若き作家たちと読み解く、宮本三郎の美術論」

今年度から始まったシリーズ(作り手から見た、宮本三郎)の第3回は、近隣の多摩美術大学造形表現学部と連携し、若き作家たちの視点から宮本三郎の思考と作品に迫ります。50年前に出版された宮本の技法書や美術論などを大学の授業で読み込み、その成果を美術館にてレクチャーしていただきます。

- 日時 / 2010年1月23日(土) 14:00～15:30
- メインパネリスト / 青木 淳(多摩美術大学准教授・美術史家)
- 会場 / 宮本三郎記念美術館 講座室
- 参加費 / 500円 50名(申込先着)

※イベント詳細や申込方法は、(財)せたがや文化財団情報紙「情報ガイド」(区報の折込、毎月25日号)または当館ホームページなどでお知らせいたします。

www.miyamotosaburo-annex.jp

本館情報

世田谷美術館 www.setagayaartmuseum.or.jp

〒157-0075 東京都世田谷区砧公園1-2

電話03-3415-6011(代) ハローダイヤル03-5777-8600

■企画展

「内井昭蔵の思想と建築 自然の秩序を建築に」

12月12日(土)～2010年2月28日(日)

「川上澄生：木版画の世界 栃木県立美術館所蔵作品による」

2010年3月13日(土)～5月9日(日) ※4月13日(火)は展示替えのため休室

■収蔵品展

「和のいろ・かたち 日本画と工芸作品を中心に」

9月19日(土)～12月17日(木)

「麻生三郎と世田谷の作家たち」

2010年1月5日(火)～4月9日(金)

分館情報

清川泰次記念ギャラリー

www.kiyokawataiji-annex.jp

〒157-0066 世田谷区成城2-22-17 電話03-3416-1202

「うららかに・清川泰次が写した昭和の女性達」 12月5日(土)～2009年3月22日(月・祝)

向井潤吉アトリエ館 休館のお知らせ

向井潤吉アトリエ館は、耐震調査の結果、耐震化工事が必要となりました。今後も皆さまに安全にご利用いただくため、急きよ、平成21(2009)年3月16日(月)より当分の期間、休館することになりました。皆さまにご迷惑をおかけすることを、心よりお詫び申し上げます。

向井潤吉アトリエ館が休館のため、

世田谷美術館2階ライブラリー前の小コーナーにて、

12月5日(土)から2010年3月22日(月・祝)まで、

昨年度に寄贈を受けた向井潤吉の新収蔵作品を展示いたします。



向井潤吉
 《冬ざれ(愛知県豊川市御治町)》
 1950年頃